

令和 5 年 6 月 5 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00385

研究課題名(和文)文化研究勃興期におけるウェールズの経験の意味 「例外的戦闘性」とR・ウィリアムズ

研究課題名(英文) Meanings of Welsh Experiences in the Formative period of Cultural Studies: "Exceptional Militancy" and Raymond Williams

研究代表者

大貫 隆史 (Takashi, Onuki)

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：40404800

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：文化研究(カルチュラル・スタディーズ)の勃興期は、従来的に、イギリス的な経験という観点から記述されることが多かった。現在の支配的なカルチュラル・スタディーズ(文化研究)の実践においては、文化的な変化を政治的な観点から解釈、分析、記述することが多くなっているとしたら、ウェールズの経験という観点を導入してみると、「変化」の内実だけではなく、「変化の長さ」それ自体が、カルチュラル・スタディーズの源流とされる書き手たちの(少なくとも)一部によって問題化されてきたのではないかと、という本課題の問題提起は大きな意味を持ちうる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

文化研究(カルチュラル・スタディーズ)において、文化的な変容に見出されうる意味や価値をはかる尺度について、政治的なそれを用いることが多くなってきており、そのことを全否定すべきではない一方で、カルチュラル・スタディーズの勃興期を振り返り、そこでの「社会」「コミュニティ」「文化」といったキーワード群の用法を考察してみると、「変化の長さ」それ自体が問題になっていたのではないかと、という問題意識を持つことができる。

研究成果の概要(英文)：The formative period of Cultural Studies has often been described in terms of British experiences. If it is appropriate to mention that dominant practices of Cultural Studies have come to interpret, analyze or describe cultural changes from the perspective of "politics," then we can attach a deep significance to the question raised by this research, as to whether "duration itself of cultural changes" was problematized by at least some of those who can now be positioned as founders of Cultural Studies.

研究分野：カルチュラル・スタディーズ、英文学

キーワード：レイモンド・ウィリアムズ ウェールズ 文化研究 カルチュラル・スタディーズ ウェールズ英語文学

1. 研究開始当初の背景

本研究課題「文化研究勃興期におけるウェールズの経験の意味—「例外的戦闘性」とR・ウィリアムズ」を開始した際の背景には、文化研究(カルチュラル・スタディーズ)が直面せざるを得ないいくつかの問題点が関わっている。そのひとつが、「文化」の意味や価値が「政治(politics)」に、ほとんど限定されてしまうことがある、という歴史的に形成された条件である。イギリスの批評家・文学研究者・理論家である Francis Mulhern の *Culture/Metaculture*(2000)に緩やかに依拠するのであればこれは、文化=政治という新たな公式が力をもった、ということになるだろう。決して全否定すべしではなく慎重な部分否定が必要になるこの公式だが、問題点として挙げるのは、「政治」というよりも「社会」や「コミュニティ」といった鍵語を使って「文化」を記述し論じることが、ある意味でいまや困難になってしまっている、ということである。しかし、少なくとも文化研究の勃興期では、これらの言葉は、「政治」と等号では結びがたい鍵語として使用されていたのであって、この時期を分析することで、「文化=政治」という支配的な公式の外側を、いわば「覗き込む」ことができるのではないか、というのが、本課題開始時の問題意識となる。

2. 研究の目的

勃興期の文化研究は、もっぱらイギリス(British)的なものであると解されてきたが、ウェールズの経験という観点をを用いることで、カルチュラル・スタディーズの勃興期の位置付けを捉え直すことが、本課題の主たる目的である。ウェールズの歴史家で小説家でもある Dai Smith は、20世紀前半のウェールズ南部の特殊性を強調しつつ、そこでのワーキングクラスが、「例外論的(exceptionalism)」な自己組織化を達成したと示唆する(*In the Frame* 2010)。本課題では、勃興期文化研究と深く関わるウェールズの経験を、「例外的な戦闘性(exceptional militancy)」と呼称しながら、それが、カルチュラル・スタディーズの諸源流のひとつとされる Raymond Williams に及ぼした影響を考察する。

3. 研究の方法

勃興期文化研究関連図書、ウェールズ英語文学関連文献、イギリス政治史関連文献などの分析を行いながら、狭義の文学的・文学研究的ライティングを、その他のライティング、言動、経験(例えば政治的なそれ)と関係づけることで、「変化(の長さ)」「社会」「文化」といった鍵語(の用法など)に現れるような重要な問題点を析出しようとする点に、本研究の方法的特殊性が見いだされようだろう。社会については、政治的な力(パワー)が衝突する場所としての社会というよりも、人間集団がその構成員を相互に重複させつつ、なおも複数存在して、摩擦や衝突を生じさせつつもなおも(だからこそ)協力し合うことがある、という「社会」というイメージの析出が重視される。コミュニティについても、社会が過度に競争的であるがゆえにそれを保管する均質なコミュニティというイメージというよりも、個人と集団との緊張感をともなった関係こそがコミュニティを変容させる生産的な契機をもつコミュニティ、といういまや残滓的となっているイメージの析出が模索された。なお、残滓的という言葉は、定式化された概念というより、一種の観念ないしは、日常的な言葉遣いと(不)連続性を利用したかたちでの一種の「言葉遣い(wording)」である。「残滓的」についての、ウィリアムズ自身による記述については、*Marxism and Literature*(1978)などを参照。ウィリアムズのライティングにおいては、精緻な概念化作業というよりは、「言葉遣い」とでもいふべき実践が重視されているのではないか、という問題系については、大貫隆史・河野真太郎・秦邦生編『文化と社会を読む 批評キーワード辞典』(2013年)が有益かもしれない。

4. 研究成果

2019年度は、日本英文学会におけるシンポジウム報告と、『レイモンド・ウィリアムズ研究』で公表した論文に結実するかたちで、研究を進めた。両者の準備過程では、NHS(国民健康保健)の実現に大きな役割を果たした政治家として知られるウェールズの政治家 Aneurin Bevan、詩人で短編小説の名手として知られた Alun Lewis、レイモンド・ウィリアムズなど、政治と文学といった複数の領域にまつわる人物たちの経験、言動、ライティングを比較し、それぞれで含意されている「変化の長さ」について、ダイ・スミスによる研究に大きく依拠しつつ考察を行った。D・スミスは、ベヴァンが保守党政治家たちと強烈な文化的闘争(ヘゲモニー的なそれ)をくり広げたことを記述しつつ、そのウェールズの特殊性を示唆する(D. Smith, *Aneurin Bevan and the World of South Wales* 1993)。ベヴァンの言動で想定されている「変化の長さ」とは、いってみれば、極小の短さであり、即座に「いま・ここ」で、人びとの意識を変容させてしまおうとする意図を見いださるものである。ところが、こうしたベヴァン的な、いわば「短い文化革命」は、後続世代であるアラン・ルイス、レイモンド・ウィリアムズたちにとっては、その共有がごく困難なものであった可能性が低くないのではないか、という解釈を呈示した。ただしそれと同時に、そうした困難さこそが、A・ルイスやウィリアムズらに見られる試行錯誤のリソースであったのではないか、という解釈も試みた。「ふつうの人びと(ordinary people)」とのあいだの

ベヴァン的な距離感とは質的にことなる関係性あるはかたちを、A・ルイスやウィリアムズらは模索したのではないか—だからこそ、前者に見られる非歴史的な「ふつうの人々」というかたちや、後者に見られる「ふつうの人々」をある重要な意味で「裏切る」突出した人間というかたちが出てきうるのではないか、という解釈も提出した。

2020年度は、主として、『レイモンド・ウィリアムズ研究』に公表した論文に結実するかたちで、課題の遂行を行った。同論考では、レイモンド・ウィリアムズが行ったとされる「文化のソシオロジー」と「感情構造の記述」であるが、これら両者は果たして同時に実践可能なのか、という文化研究(カルチュラル・スタディーズ)にとって、核心部にに関わりうる問題について考察が展開された。論文公表に至るまでの準備過程において、レイモンド・ウィリアムズがおそらく意識していたであろう問題系について、ウィリアムズの講義録である『ディケンズからロレンスまでのイングランド小説(*The English Novel from Dickens to Lawrence*)』を解釈の対象としながら、「変化の長さ」に関わりうる部分について考察を試みた。同書中のウィリアムズは記述に成功しているのは、Dickensから(序文で言及されるJane Austenから、ではないことが重要である)D. H. Lawrenceまでのイングランド小説の書き手たちが、物質的あるいは現実的には即座には解消し得ない諸矛盾に対して、いってみれば「野生の思考」的に(ただしウィリアムズにしてみれば「野生」も「思考」も適切な言葉遣いとなり得なかつたであろうが)なおも「いま・ここ」で強烈に関与してしまう様相である。これは、本課題の問題意識に添って換言すれば、「短い文化革命」の一種と見なしうるものであり、それを記述するウィリアムズもまた、「長い革命(Long Revolution)」を掲げつつも、なおベヴァン的な「即座の変化」に深く影響されていたことの証左となるだろう。ところが、『ディケンズからロレンスまでのイングランド小説』で記述されている書き手であっても、例えば、Charlotte Brontëであっても、1970年代後半になると、かなり異なったかたちで記述されるようになってしまう。そこでは、対象となるライティングとかなり距離をとった、いわば「ドライ」な記述が実践されている。そうした「文化のソシオロジー」的な記述におけるカルチュラル・スタディーズの実践には、ショートスパンでの変化をときに重視する「感情構造の記述」とは、じつはかなり異なる側面があるのではないか、という疑問を探究した。

2021年度は、主として、オンラインで開催されたレイモンド・ウィリアムズ生後100周年を記念する国際シンポジウムでの口頭報告、及び『レイモンド・ウィリアムズ』誌での論文公表に結実するかたちで、課題の遂行を試みた。ウィリアムズがベヴァン的な「即座の変化」と、「長い文化革命」のその双方に関わる書き手があることが、過年度の課題遂行のプロセスで明らかになってきた。仮に、いわゆる第二世代ニューレフトの書き手たち(Perry Anderson, Anthony Barnett, Francis Mulhernなど)との対立あるいは緊張感(さらには緊張感をともなった協力関係)を見いだすことが、文化研究(カルチュラル・スタディーズ)の現在を考えると重要であると言えるでしょう。そのとき、彼ら第二世代とウィリアムズの比較を試みる作業のなかで、この「変化の長さ」問題があらたな価値を帯びる可能性がある。P・アンダーソン、バーネット、マルハーンらは、1970年代の末に、ウィリアムズをときに詰問するかのような激しい長時間のインタビューを行ったことがよく知られている(Raymond Williams, *Politics and Letters: Interviews with New Left Review*, 1979)。このインタビューのなかで、とくに、ジェイン・オースティン評価をめぐる、ウィリアムズと第二世代は、深刻な一種の「すれ違い」を露呈する。第二世代はオースティンの政治的(無)価値を強調してほとんどそのライティングを全否定しかねない勢いであるのに対し、そのときのウィリアムズは、「社会」と「政治」を分離させる作業をしながらオースティンを慎重にいわば「部分肯定」しようとする様相を、論文公表に至るプロセスなかで考察した。また口頭報告に至る過程のなかでは、後期のウィリアムズが強調するようになったと言いつける「フォーム(かたち)」という観点について、フォームを記述する書き手が、社会のなかでいかなるポジショニングを利用しうるのかという問題について、ポピュラーなアートの作品ジャンルを素材としながら、一般的な研究に資し得る考察を試みた。

2022年度は、主として、『語りの力』に収録された分担執筆稿「都市と自然を書くこと、そして語ること—レイモンド・ウィリアムズ『ブラックマウンテンズの人びと』を読むために」の公表に結実するかたちで、課題の遂行を進めた。同稿は、2020年度の講演が原型になっているものであるが、これを公表するための作業を進めるなかで、本課題の中心的問いである、文化研究が記述する「変化」の「長さ」そのものについて、考察を深める機会を得た。ウィリアムズの死後刊行小説『ブラック・マウンテンズの人びと』の、とくに地質学にかかわる記述を同稿で焦点化しているが、ウィリアムズは強烈なまでに長大な地質学的な時間軸を巧みな筆致で小説内のかたちにすることに成功している。ところが、そうした、いわば「超ロングスパン」での地質学的変化が比喩的に共有させる文化的変化の経験が、やはり「超ロングスパン」である一方で、そうした長大な時間軸を記述する書き手の社会におけるポジショニングとなると、その「変化の長さ」がベヴァン的な「即座の変化」におけるそれになり得る、という点が重要である。学ぶ書き手の「裏切り」問題とでもひとまず呼称できそうなこの問題系について、時間軸の長短と文化研究(カルチュラル・スタディーズ)の抱える諸課題という本研究課題の問題意識を発展させつつ、課題期間終了後も、継続して考察を進めていきたい。

カルチュラル・スタディーズ(文化研究)は、文化的「変化」のもたらす政治的変容の内実を強調してきた一方で、「変化」それ自体の「長さ」という重大な問題系について、それをいわば「残滓化」させてきてしまったのではないか、という問題意識を本課題は持っているが、これに

ついで、ウェールズ的な経験を考察することで、それを深化させることができるのではないかと考える。この問題提起の妥当性について、今後、議論がなされることを期したい。また、少しでもそうした妥当性があるとしたら、文化研究(カルチュラル・スタディーズ)が、その鍵語をもっぱら「政治」としてしまうことの、社会的な影響について内省的に考察する契機となることも期したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 大貫隆史	4. 巻 8号
2. 論文標題 「しかし歴史にはいくつもの流れがあり」：レイモンド・ウィリアムズ『ディケンズからロレンスまでのイングランド小説』におけるジェイン・オースティン論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東北ロマン主義研究	6. 最初と最後の頁 33-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大貫隆史	4. 巻 10
2. 論文標題 文化のソシオロジーと感情構造記述は同時に実践可能か？	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 レイモンド・ウィリアムズ研究	6. 最初と最後の頁 5-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大貫隆史	4. 巻 9
2. 論文標題 ふつうの人びと、突出する人びと 南ウェールズの書き手たちと「裏切り」の問題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『レイモンド・ウィリアムズ研究』	6. 最初と最後の頁 25-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Takashi Onuki
2. 発表標題 Forms and Relations in Raymond Williams: A Case of Japanese Manga
3. 学会等名 The Centenary Symposia: Raymond Williams in an Age of Globalisation - Symposium3: Raymond Williams in Japan (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大貫隆史
2. 発表標題 ふつうの人びと、突出する人びと 南ウェールズの書き手たちに見られる具現性と誠実さそして裏切り
3. 学会等名 日本英文学会第91回大会シンポジウム「Literature is Ordinary? 20 世紀の英文学と「ふつうの人びと」」
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 東北大学大学院文学研究科講演・出版企画委員会	4. 発行年 2023年
2. 出版社 東北大学出版会	5. 総ページ数 176
3. 書名 語りの力	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------